もう一人の牧水 ―小野葉桜―

元延岡市立図書館長
九鬼　勉

目次

一　はじめに
二　葉桜の生い立ち
三　牧水との出逢い
四　葉桜と牧水の上京
五　葉桜の第一の悲運
六　新しい生活
七　葉桜の第二の悲運
八　葉桜の第三の悲運
九　運命の東京大空襲
十　さいごに

一　はじめに

明治という時代は、一言でいえば、「志の時代」だと思います。司馬遼太郎の小説ではありませんが、明治の青年それぞれが、自分の「坂の上の雲」を目指した時代だと言えます。

四国の松山では、正岡子規、秋山好古、秋山真之兄弟がいましたが、ここ日向の入郷地区では、若山牧水、小野葉桜、小野兵太郎（後の西郷村村長）が、それぞれの「坂の上の雲」を目指しました。

本稿の主人公小野葉桜は、三人の中で最も不幸な人生を送りましたが、最後に奇跡的にその名をこの世に留めることができた人物です。もし、人力車事故という不幸な事故にさえ遭わなければ、日向の地にあって、牧水に次ぐ数々の秀歌を残し得た人だと思います。そういう意味で、本稿のテーマを「もう一人の牧水――小野葉桜――」とさせていただきました。

二　葉桜の生い立ち

葉桜は、明治12年（１８７９）6月15日、東臼杵郡西郷村（現美郷町）大字田代小川吐（おごのはき）で、父熊四郎、母チヨの長男として誕生しました。本名は、小野岩治（いわじ）。三人の中では、最も年長で、牧水より6歳、兵太郎より5歳年上ということになります。

明治19年（１８８６）、7歳で田代尋常小学校に入学します。一方、牧水は、明治23年（１８９０）、5歳のときに、父立蔵が西郷村の若山分院に転居したのに伴い、西郷村にやって来ます。

若山分院が小野兵太郎の家の近所だったので、二人は幼友達になりました。しかし、この時は、牧水と葉桜の直接の交流はありませんでした。

明治24年（１８９１）、葉桜は、12歳で田代尋常小学校を卒業すると、その後の行動は、延岡の旧藩主内藤家経営の「亮天社（りょうてんしゃ）」に学んだとも言われていますが、今のところ詳細は不明です。

明治32年（１８９９）、20歳の時、葉桜は、美々津小学校で代用教員をしており、このときの住居が、美々津新町の大森豊吉方でありました。この家には、後に妻になるナミエ（当時14歳）がいました。実にナミエと牧水は、同い年ということになります。

明治32年は、牧水が、延岡高等小学校を卒業して、創立されたばかりの県立延岡中学校に、第一回生として入学した年です。

この年の暮れ（12月1日）に、葉桜は、久留米の第12師団第23連隊に看護卒として四ヶ月間の現役兵務につきます。

明治33年（１９００）、葉桜は、看護卒としての兵務を終えると、田代小学校に代用教員として勤務します。後に歌仲間となる小野兵太郎は、このとき高等科四年に在学していたので、葉桜に習ったとのことです。ところが、上京するとの理由で、葉桜は一学期で退任します。しかし、直ぐには上京はいたしませんでした。

三　牧水との出逢い

明治35年（１９０２）10月、葉桜は、再び美々津小学校に勤務します。

同3日に、葉桜は初めて牧水に手紙を出します。そのときのことを牧水は、次のように日記に書いています。

「帰れば、田代の小野葉桜君というより、来状し居たり。『詩文』という雑誌など贈らる。しゃれた本なり。」

これは、9月の「日州独立新聞」に掲載された牧水と小野涼風（兵太郎）との歌の競詠を見て感化され、葉桜が、牧水宛に手紙を出したものと思われます。

牧水と葉桜が初めて顔を合わせるのは、この年の暮れ、牧水が冬季休暇の時でした。

12月29日、牧水は、従兄の若山冰花（ひょうか）と美々津の葉桜を訪ね、三人で歌合せをしました。歌合せとは、「題」を出し合って、お互いの歌の優劣を競うものです。

このときのことを、牧水は、次のように日記に書いています。

「冰花兄と、福瀬まで陸行。それより舟にて美々津に到り、小野葉桜君を訪う。初対面なり。直ちに歌合せを開く。題は、梅、椿、磯、硯、春の五つ。夜浜田屋に泊す。又小野君等と、短文会、連歌会を開く。」

明治36年（1903）1月12日、美々津で行った牧水と冰花と葉桜、三人の歌合せが「日州独立新聞」に掲載されます。

4月1日に、牧水等は、短歌専門雑誌「野虹（やこう）」第一号を発行します。「野虹」は、延岡中学生による牧水を中心とした短歌愛好仲間「野虹会」が発行する回覧雑誌です。延岡中学生以外の参加も認められていました。

この創刊の巻頭を葉桜の歌一〇首が飾ったのでした。

それは、次のような歌でした。

若草に花に緑の野の水に盲目（めしひ）を許せ春を行く神

7月には、「野虹」三号が発行され、葉桜は、歌五首発表。その中の一首、

春草のしめりをかしき伽羅（きゃら）の香に鐘楼まぢかく梨の花ちる

8月には、「日州独立新聞」に葉桜の歌六首掲載。その中の一首、

雨晴れぬ月の欄干人うつくし加茂を夜風に吹かれていにし

この頃、美々津新町の金丸医院に住み、医師又は薬剤師になるために上京を計画します。

金丸医院の院長・金丸禎造（号は梅林）は、浄瑠璃を語り、俳句を作る風流人で、葉桜とは馬があいました。

明治37年（1904）1月8日、牧水が西郷村田代に訪ねて来、小野兵太郎と三人で歌会をします。そのときのことを牧水は、次のように日記に書いています。

「早暁、五本松を越えて田代に向かう。葉桜紫苑（註・小野兵太郎）両君を訪わんとてなり。霜深く、柱また高し。独行なれば気まに遊び、歩き、走り、案外に早く小川村の紫苑君宅につけば両君共に待ちてあり。嬉しい哉。夕方、共に本村まであそびに行く。夜ひさしぶりにて歌会をひらく。」

一方、平成5年11月30日発行の「西郷村史」によれば、兵太郎も、この日のことを、日記に次のように書いています。

「和泉屋にて菓子を求む。前十時三十分帰宅す。同十一時若山氏、葉桜氏来訪す。（初めて杖鉋を見る）ひる飯を食し仝々三人同々峯

町へ。散歩す。又も泉屋にて草子（註・菓子の誤りか）ぜんざいを食す。三人分余支払う。后六時半帰す。今宵酒あり鶏あり。歌合わせをなす。題左ノ通り、歌は余が腰折れ。葉桜の縁福話あり。」

そして、次の三首の歌を残しています。

酒興　友三たり酒にたはれのざれうたも昔にかへる恋の夜がたり

野百合子（註・牧水）の来訪に就いて

足入るる処もあらぬあばらやを訪はれし君を現とも見む

梅　梅をくと友の知らせを筆にしてしるせし墨のうらはづかしき

三人が鶏を肴に、酒を飲みながら、賑やかに歌合せをしているさまが目に見えるようです。この夜は、葉桜の縁福話に花が咲いたようです。多分、ナミエのことであろうと思われます。

翌9日は、葉桜と兵太郎が牧水を坪谷まで送って行き、牧水の家に泊まります。そのときのことを、牧水は次のように日記に書いています。

「朝十時頃より、葉桜紫苑両君を引っ張り出してまた五本松を越えぬ。空晴れず、遠かた（おち）、雨か雪か、ほの白う見渡されぬ。二時着。やがて風出でて、しかも烈し。夜、市谷原に那須健司君を訪う。葉桜氏の郷友なり。」

翌10日は、牧水の家で、三人歌合せをし、正午、葉桜たちは西郷へ帰ります。そのときのことを、牧水は日記に次のように書いています。

「朝の間、水仙、霜柱、鶯の三題にて歌会をやる。正午、両君は遂に袖を払って帰らる。西の内まで見送りぬ。その後は独りでねっからつまらず。」

まるで、恋人と別れた後のような牧水の言葉です。この頃の牧水にとって、歌を一緒にする仲間は、恋人同然の存在だったようです。

四　葉桜と牧水の上京

25日、葉桜は、美々津から木曽川丸に乗り上京します。麹町の常盤館（ときわかん）に住むことになります。

牧水も、3月29日に、延岡中学校を卒業すると、4月10日に上京します。葉桜は、牧水を迎えに行き、葉桜の住む麹町の常盤館に案内します。このときのことを牧水は、次のように書いています。

「六時新橋着。早々巡査奴に叱らるるなどの失敗ありて、小野君（註・葉桜）に迎えられその宿麹町三番町五七伊川方に行く。同室に美々津の岩本君というがあり。無事着の電報を国の母に打って、昼より上野へ桜狩に行く。」

翌朝、早速、牧水は、葉桜に連れられて早稲田大学に行きます。そのときのことを牧水は、日記に次のように書いています。

「朝、小野君に連れられて、早稲田の学校に行く。構造宏大にしてまごつく事一方ならず。漸く高等予科の事務所について入学の許可如何を問へば、出身学校の卒業証明書が無いというので許可せずと

答ふ。」

一旦は、入学不許可になった牧水であったが、翌々日に再度早稲田に行き、色々と交渉した結果、何とか許可されました。それは、牧水の日記に、次のように書かれていることから分かります。

「昼より一人早稲田へ行く。いろいろ交渉の上、入学を許可せらる。保証人は下宿の亭主殿にたのむ。」

ほどなく、後に葉桜の妻となるナミエも上京し、芝区に住みます。このとき、ナミエは19歳でした。

五　葉桜の第一の悲運

5月18日、葉桜も、ナミエと新婚生活を送るつもりで、芝区のナミエ方に移ります。このときのことを、牧水は日記に次のように書いています。

「小野君、転宿の用意忙し。学校で変わりしもなし。帰って見れば、小野君既に在らず。」

ところが、ナミエと同居したばかりの葉桜に、第一の悲運が襲います。日露戦争への召集の礼状が来たのです。それは、牧水の5月20日付の日記で分ります。

「校（註・早稲田大学）より帰れば、葉桜訪ね来て、召集令の来たれるを告ぐ。彼かねて看護卒たれりしをもてなり。事甚だ急。彼我恍としてなす所を知らず。特に彼は今、身一つにあらざるなり。」

これには、牧水も葉桜もただ茫然とするばかりでした。特に葉桜は、ナミエと一緒になった直後であっただけに、驚きは一入のものがあったと思います。

しかし、召集礼状が来た以上は、その命に直ちに服さざるを得ないのが当時の国民の常でしたので、とやかく言っている暇もなく、葉桜は、出京いたします。そのときのことは、牧水の5月21日付の日記で分ります。

「帰って又直ちに、岩本君と共に、芝区琴平町一番地赤壁惣右衛門方に小野君（註・葉桜）大森君（註・ナミエ）を訪ふ。着のみ着のままで行くとて準備もすでに整ひ居れり。友、吉田君、黒木君、白石君（以上二人美々津人）も来たり会す。六時半発の汽車にて遂に立てり。車内まで見送る。厭な感じの去らぬは致し方もなし。その帰路、岩本君の他に寄りしを待ちて大森君と共に又その家に止まりて、九時より帰る。」

「厭な感じの去らぬは致し方もなし」という言葉に、「ひょっとしたら、葉桜は戦死し、これが最後の別れになるのでは。」という不安が、牧水の胸を過ったことと思います。

葉桜は、熊本の第六師団第三野戦病院に看護卒として編入します。

6月19日、葉桜は、長崎を出帆し、中国大陸に渡ります。この日露戦争に従軍しているときに、葉桜の詠んだ歌、

首山堡で脳を撃たれ病院に来て唄うたひつつ死にゆきにけり

徴発に出て遼陽の海原に沈む夕日をおろがみにけり

遼陽の戦いは、明治37年（１９０４）８月28日から９月４日にかけて行われた日露戦争における大規模な陸戦。日本13万、ロシア22万の兵力を投入し、戦闘は熾烈をきわめました。ことに首山堡の争奪をめぐる攻防は激戦で、日本軍は、９月４日に占領し、遼陽の包囲を恐れたロシア軍は退却したとのことです。

このような熾烈な戦いに、葉桜は直接戦闘することはありませんでしたが、看護卒として従軍していたわけです。

最初の歌は、首山堡の戦いで、脳を撃たれた兵士が、病院で治療の甲斐もなく、唄をうたいながら死んで行ったといういたましい歌です。最後に負傷兵の唄った歌は、「故郷」ではなかったかと私なりに想像いたします。

二首目の歌は、戦闘に必要な物資、主に食糧と思いますが、それを現地調達に出たときの歌です。遼陽は、内陸ですので、海はありません。ここでの海とは、遼陽を流れる大河・遼河のことと思います。たまたま遼河に沈む夕日を見た葉桜は、それを思わず拝んだという歌です。拝んだ内容は何か分かりませんが、あまりにも壮大な天地の威容に心打たれて拝んだのか、あるいは、妻ナミエの待つ日本に一日でも早く生きて帰ることを願ったのか――。おそらくその両方ではなかったかと思います。

これらの歌は、今までに歌っていた歌とは、随分趣が異なっており、実情実感に基づいた歌であるということができます。この頃台頭してきていた自然主義の影響も十分あると考えられます。

六　新しい生活

金丸医院跡

明治38年（１９０５）７月、葉桜は、召集解除となり、無事に日本に帰って来ます。その後は、美々津の金丸医院の薬局を手伝ったり、美々津の小学校に勤務いたします。

この頃、大森ナミエと正式に結婚します。金丸院長が、ナミエの父豊吉を何とか説得することができたお陰でした。

明治39年（１９０６）１月６日、葉桜は、田代小学校の同窓会で「人生と趣味」と題して演説を行います。それが縁となったかと思われますが、１月末から同小学校で代用教員として勤務いたします。

４月以降は、妻ナミエも、同小学校の裁縫教員として勤務いたします。

12月からは、役場前で薬店を開業したり、養蚕事業に従事したりします。同時に田代の青年たちに対し、「峰青年会」を組織し、指導を行うようになります。

田代の葉桜の歌碑

明治40年（１９０７）、葉桜の地域に貢献する活動が、評価されたためであろうか――。10月に28歳の若さで、東臼杵郡会議員に選ばれます。そして11月２日には、待望の長男博が誕生いたします。

この頃の葉桜は、慶事が重なり、まさしく、順風満帆でありました。

明治41年（１９０８）、葉桜は、久しぶりに、牧水に手紙を出します。それは、12月20日付の牧水の次の手紙で分ります。

「久しぶりにおたよりを見てうれしかった。御無事ご健在は何より目出度い。山村の冬日がよく眼にうつる。頃日来しきりにそこらの寂しい温かな光景がなつかしくなっていたところであった。御葉書の冒頭、しかも久しぶりのそれの書き出しが、『生活難云々』には面くらったね。まったくお察しの通りの境界なので、多言を要しまい。けれども僕の生命は甚だ充実して居るのでそれだけは安心してくれたまえ。お別れしてから随分と色んなことに逢着した。別しても今年に入ってそれはそれはの事件に無闇と打ち衝った。さすがに弱り込みもしたがまだ根本には真っ赤な血が燃えて居る。いくら打たれても叩かれてもそれなりに消失するほどには至らぬ。で、従っていらぬ苦労をもさかんに買った。現に買いつつ苦しみつつある。遠く諸君の眼から観たらさぞ笑止にも滑稽にも見えるであろう。一寸振り返って見るとたとえいざこざの悶着はあったろうともまア概して僕相当の道を歩いて来ているように考えらるる。で、うらみもせぬ。慨嘆もせぬ。このままでとにかくに行けるまで行こう。よそ目から観た僕についてなお多くを聞くをえばまことに幸甚だ。しかし時には心(シン)から諸君の生活を羨ましく思う時がある。殊に老親をあしておいてるので非常に気がかりだ。いっそ帰国して・・・などと塩垂れる時がないでもない。若いからね。それはいろんなことを思うさ。だって思って苦しんでるのが乃公連の生命じゃないか。この一月の十日に雑誌（註・「新文学」）を出す。これも僕の「騒ぎ」のうちの一つさ。どうせ僕には大人しい規律的の仕事はできないんだから。から騒ぎにでもうんと思い入れ騒ぐことが好きなのだ。いづれしくじるにはきまってるのだ。ただしくじる道すじが面白かろうじゃないか。遠くから見ててご覧、どんなしくじりようをやるだろう。僕にもまだよく分からない。

今日やんやらやっと編集を終わった。明日印刷屋へ廻す。二三日うちに家を構える。（註・園田小枝子と所帯を持つために、１２月末に牛込区若松町１１８番地に一戸を借り、ばあやを雇い移る。）これからは商売人と詩人とのかけもちをやらねばならぬのだ。紺の前垂でもかけて夕べの雲を仰いで泣く顔などは頗振るった形だろうじゃないか。今夜も東京堂の番頭を引っ張り出してビヤホールをおごって恭しくお引き立ての光栄を得むことを力めて来た。ウマイもんだろう。（略）手紙は時々やりとりすることにしょう。でないとちょいちょい淋しくてたまらぬ。兵太郎君には僕はどうも全く面目を失している。君からしかるべく伝えてくれ。君にはわるいことをしてもさほどには思うまいが兵太郎君に対しては無沙汰してても気がとめる。それでいてやはりブサタしている。雑誌は送りましょう。詩集も送ろう送ろうでこの通りだ。こんどこそ本当にしましょうか。『海の声』は僕の懺悔だ。僕の若き日の墓だ。いまこの詩集に向かうと何だか昔別れた情婦に邂逅したような気がする。（略）いつぞや縁日で、坊ちゃん（註・葉桜の長男博）に贈るべく面白いオモチャを買って来たことがあったけが、どうかなってしまった。待たずに待ってくれ。また何か目に着いたら拾い出して来ましょう。大きくなったろう。」

七　葉桜の第二の悲運

このように、牧水と再び旧交を温め始めた葉桜であったが、第二の悲運が葉桜を襲った。

明治42年（１９０９）、延岡で東臼杵郡会に出席しての帰り、人力車からまっさかさまに落ちて頭部を強打し、病を得てしまったのです。一説に、政敵に頭を強打されたという話もあります。そのため、在任一年余りで郡会議員を辞職してしまいました。

明治43年（１９１０）３月には、次男愛（めぐみ）が生まれようとする頃、欠勤しがちであったナミエに26日に休職が命じられます。やがて、次男愛が誕生し、西郷村田代から美々津の今江町の借家に移ります。この頃から、葉桜は、再び歌を作り始めたようです。

明治44年（１９１１）１月、たまたま投稿した歌が、「東京時事新報」の新春文芸短歌選で一等に選ばれ、その賞品として選者の金子薫園より薄田泣菫の詩集「行く春」を贈られました。

その歌とは、

うす靄のあやぎぬ巻けば美しき初日浮かべて新汐寄する

元日の初日を詠んだ歌です。

美々津小学校跡（現美々津支所）

一方、妻ナミエは、一家の生計を支えるために、美々津小学校に裁縫教師として勤務します。

明治45年（１９１２）、この頃になると、病状もよくなり、ナミエの叔父近藤長吉が町長をしていた関係もあり、町役場の職員となり、百町原開田組合の事務を担当します。

一方、牧水は、父危篤の報に接し、取る物もとりあえず帰郷いたします。牧水にとっては、苦悩の帰郷でしたが、葉桜にとっては、幸運な牧水の帰郷でした。

その結果、二人の文学的交遊が再び始まったのです。

８月８日、牧水は、友人工藤一二宛に、葉書を出します。

「葉桜は美々津だろうか。逢ってみたい」

工藤からの返事で、葉桜の住所が判ったようです。

８月10日、早速牧水は、美々津の葉桜に次のような手紙を出します。

「冒険が当たって、すぐおところの知れたのはうれしかった。兵太郎君からはまだ返事が来ないうちに、まったく、しばらくでした。三十八年か九年きり、逢わずにいると思うから、よほどになるでしょう。君の病気のよしを、どこかできいて、とんでもないことだと、いろいろ苦痛に思うことが多かった。実は、とても直るまいなどという噂をも、それと同時に聞いていたので、手紙もよう出さずにいたのです。すると、よくなったそうだという話をきいて、半信半疑でいるうちに、事実だと確かむべき条件をあれこれ認めたので、ああよかったと安堵したのでした。実際、人間というものは、僅かの時間のうちに、ほんとにいろいろなことをするように出来ているものですね。それだから生き甲斐があるのだと云えば云えましょうが、驚くことがまことに多い。とにかく、一段落を経て新しい生涯に入られたことをおふたりのためにお歓び申します。すると、いまは一家内移住してそこなのですか。僕はまた暫時そこへおいでてい

るのかしらと思ってました。少ない諸君ももうよほど大きくなってでしょう。僕はいちばん兄さんの、アレハ博君でした、を知っているきりなんだ。僕もあれから、いろいろまごついてましたよ。考えてみればまことにばかばかしいが、そのときは、なかなか真剣なのだから、くやむわけにもゆきません。あんまり我ままばかり働いていた罰で、とうとうこんどは幽閉だそうです。苦笑しています。

とにかく早くお目にかかりたい。実は明日あたりここを出るつもりでいたのです。ところが、東京からの郵便の是非待たねばならぬのが、この十五六日（折も折サ）に来ることになったので、自然出立をも延ばさねばならなくなったのです。すると、丁度君のおるすになったあとに行くわけになります。実に残念だが、やむを得ますまい。で、しかたがないから、帰りに美々津をたずねましょう。二十五六日にはお帰りですか。美々津に。それから、ここにもう一つ話がある。僕の出立を十七日あたりにきめておいて、ここへ君から来ていただくのです。そして、ここから田代の方へ行くとすれば、いいじゃアありませんか。そして、僕が宮崎のかへりに美々津におたづねする。万全の策だと思う。いかがです。そうしましょう。ね、是非。父の病気が、とご心配かも知れないが、もうすっかりいいのです。いまでは起きていて、毎晩私と対酌です。おいでて下されば、善き老人。どんなに歓ぶかしれません。

この物置の二階で、村の酒（といっても、わりにいい。また、特別にとらせますよ）を、たらふく飲みましょう。肴はないが、それはしかたがない。ゆっくり飲み、ゆっくり話す、というのを条件にして、是非そうしましょう。二十五六日というと、待ち遠くていかぬ。海は海、山は山、でいいところがありますよ。御返事ください。しかし、もう僕はそのことに決めている。そして、一日も早い方がうれしい。相変わらずの子供やんちゃだとして、この切望を容れて下さい。どうぞ、そうきめたら、何も書くのがいやになった。書くより、逢って、顔を見る方が雄弁である。（略）とにかく、早くお目にかかりましょう。田代の兵太郎君のおとうさんも不幸だったそうですね。兵太郎君弱っているでしょう。やはり小川にいるのですか。」

久しぶりに帰郷したものの、若山家の長男として、今後どうするつもりかをみんなからさんざんに言われ、幽閉同然の暮らしをしている牧水――。

その牧水が、唯一文学の話ができる仲間といったら、付近では葉桜しかいなかった。それで、一刻も早く会いたいと、このような手紙を書いているのです。

8月17日、牧水と葉桜は、久しぶりに再会し、美々津に遊びます。それは、美々津の川島屋から出した工藤一二宛の牧水の次の葉書でわかります。

「さっき、美々津に来た。すぐ葉桜君をたづねた。そして、あの、ソラ、あのうち（註・明治35年12月29日の初対面のときに泊まった浜田屋か）に泊ろうというと、あれよりこのうち（註・川島屋）がいいという。それでも、あすこでなくてはどうもいやだと強情を張ると、葉桜君がニヤニヤ笑いながら、もう君、かたづいてしまってるよ、という。そうなればしかたがない。あきらめるだと、ここへ来た。いま、葉桜君と静かに酌んでいる。（略）『うつせみはからを見つつもなぐさめつ深草の山煙だに立て』　古今集、悼歌。けむりにあらぬ浪の音が、いまも、この部屋に通っている。」

文学を語り合うことができる葉桜と八年ぶりに再会でき、酒を酌み交わしながら上機嫌の牧水が目に見えるようです。

10月27日、坪谷に居る牧水から、二ヶ月ぶりに、美々津の別府の葉桜に返事の葉書を出す。

「お葉書、ありがとう。すっかり御無沙汰しちゃって。もっともその無沙汰はいかにこちらでぼんやりしているかを最もよく説明するものなのです。父は病気はもういいようです。立ち居もまづ自由になりました。（略）『日州』へ歌壇のことを云ってやりましょうか。こちらにいるとすれば、ある方がひまがつぶせて結構です。とにかく近々云ってやってみましょう。君の歌をどこかいい雑誌に出したら如何です。いま私の直接関係してるのは『劇と詩』だけですが、それをお送りしましょうか。あいたらお返し下さい。しかし、ゆっくりでいい。どうです。田舎にあそびに来ませんか。そして、この速成仙人を少しなぐさめてやって下さい。生死のほども相わからぬ御有様は、わがことながら多少心ぼそい。美々津にもまた行きたいと思っています。一日か二日、じいっと浪に対っていたい。歌は久しくつくりません。早稲田文学からそう云って来ましたので、二三日前少し送っときました。十二月号に出るでしょう。出たら御送りします。」

外からの刺激がまったくない坪谷で、なすすべもなく漫然とした日々を過ごしている牧水が目に見えるようです。

11月頃、葉桜は、美々津の別府今江町から新町の妻の実家に引っ越します。

しかし、牧水の方は、父立蔵が、11月14日に突然不帰の人となりました。そして、若山家の長男である牧水の今後の身の振り方についての風当たりは一層強いものになったのです。

そういう鬱屈した気分を晴らすためでもあったと思うが、12月中旬、牧水は、美々津に遊びます。それは、牧水が、12月15日付の青森の加藤東籬宛の次の葉書で分ります。

権　現　崎

「海は、つねに私には新しいものにのみ見えます。私はいままで、ずいぶん海を見ています。そして、常に初めて見るもののような悲哀とよろこびと驚きとを印象してくれます。そして、私は、次第に自然というものを――いいえ、次第というと、わるい、このごろ初めて、自然というものを見得るようになったかと思うのです。今日、こうして、海に向かっている。海は今までに知らぬ色彩と微妙――寧ろ霊魂とを私に示しているのです。この美々津という港は、私が六歳か七歳のとき、母につれられて来て、それこそ生まれて初めて海というものを見た記憶のある港です。五六十里を流れてきた河の川口で、岬になっている所の古い港です。神武天皇は初めてこの港から帆を東の方にあげられたのだそうです。」

牧水に生まれて初めて、海の魅力を教えてくれたのは、まさしくこの美々津でありました。

後に牧水が、この美々津を詠んだ歌が、

行きつくせば浪青やかにうねりゐぬ山ざくらなど咲きそめし町

この歌は、初めて、牧水が美々津で海を見た時の感動を詠んだ歌と思います。浪の蒼さと山桜の薄紅のコントラストが何とも美しい。

この美々津滞在中に、葉桜の三男瑞樹が誕生し、牧水が名付け親となります。それについては、後に瑞樹が次のように述べています。

「瑞樹という名は牧水がつけてくれた。その夜牧水は私の家に来ていた。『あはれこの樹瑞々しくも繁れかし大空のもと野のはてなしに』とよんで、この歌の中にはお子さんの名だけでなく、私の本名（註・繁）も一しょによみ込んであるのですよ、といい、父と祝杯をあげながらあの美声でこの歌を何回も朗詠したそうです。」

牧水が来ているときに、瑞樹が誕生するとは、何とラッキーなことであろうか。このとき誕生した瑞樹が、後に葉桜を世に出すことになろうとは、知る由もないことでありました。

12月29日、牧水は、葉桜に次のような葉書を出します。

船間の磯

「とうとう、今年も暮れますね。今までにおぼえのない何とも云えぬ感が身にしきります。やっぱり、一瞬の間もあだにしたくない欲情が新たになるのをおぼえます。早く行きたいが、どうも十日ごろでしょう。いえ、都合では五六日かも知れぬ。それ前はとても不可能らしい。今度はひとつ、あの磯（註・舟間の磯）にすっかり閉じこもって、最も新鮮な、神聖な、充実した孤独の時間を送ろうかと思っています。飲むのは、帰りぎはにしたいと、今では、思っています。樋渡君（註・花明・三納村在。現西都市三納）も是非行くと力んでいますが、さかんでしょう。こんどは僕の得意の死酒をやってやろうかなどと思っています。死んだ同然の境まで飲むの謂です。よしましょうか。雑誌は、新年号を御待ちなさいな。その方が、みな実（み）だくさんでしょうから。兵太郎君には、僕の出る前に出しましょう。」

この年の暮れの牧水は、父立蔵が死んだこともあって、殊のほか感慨深いものがあったことと思います。

大正2年（1913）1月2日、年が明けると、牧水は、早速葉桜に次のような葉書を出します。

「今日、それも午後の便で、筑後の大牟田で、『暖潮』という雑誌を出している一団から、この一月五日に会を開くから、是非出てくれと、ある友人を介して云ってきたのです。（正月故郵便遅着）筑後の大牟田、遠くはあるが、山陰の兄き（註・従兄の峻一）の行っている所でしょう。彼の顔をも見たし。それこそ急に思い立って、これから細島に向かいます。五日に間に合うかどうか、とにかく、十日あまり、あそんできます。帰りにあなたの方へ廻ります。とりあえず。」

この後、牧水は、1月5日に開催された大牟田の「暖潮」の歌会に出席し、従兄の若山峻一（冰花）方に滞在します。その間、島原に直井敬三を訪ねたり、福岡の早稲田時代の友人加藤介春の下宿に泊まったりします。その後、鹿児島を訪ねた後、2月3日に帰郷します。十日あまりどころか、一ヶ月近い長滞在でした。

葉桜から牧水に便りをしたようで、2月16日、牧水から葉桜に次のような葉書を出しています。

「美々津からのおたよりは、僕にとって、常に強烈な誘惑である。美々津から、と思うと、もう痛々しく黒い岩、蒼い浪、明るい日光が、僕の心霊に浸み通ります。実は、大いに行きたいのです。けれど、旅行がたたって、金が少しもない。もしかすると、今日あたり、君がおいでるのじゃないかと、御返事は来なかったし、土曜日の昨日は、こころ待ちに待ちました。三月の中ごろというと、何かの未来記を読むようで、本当のこととも思われぬ。しかし、約束だけでもしておきますかな。そのころになると、僕もしかしそっちへ出かけますよ。二日ばかり、アノ岩の上に行って、黙アって寝ていたくてしようがないのです。美々津は霞は濃い所ですか、淡いところですか。雑誌は、もう暫く待って下さい。三月中旬発行で、僕の手で編集して、『印象』という小さな雑誌を出すことになりましたから、その編集の済むまでです。『印象』は、九州中の人が主になってやろうという相談の結果です。一緒にやりませんか。歌があったら、至急およこしなさい。初号に間に合わせましょう。そうでしょうね。瑞樹君、もうよほど大きいでしょう。可愛くなったでしょう。」

牧水は、美々津に行き、葉桜に会いたい気持ちはあるものの、一ヶ月にも及ぶ長旅行がたたって、金が少しもなく、美々津に行くことができなかったのです。

その後、間もない2月22日に、牧水は、葉桜に次のような手紙を出します。

「美々津の霞は、よかろうと思う。ねじ切るような濃密なかすみの日に出会いたいと思うのです。三月、行けますかなア。行くつもりではいますが、なにしろ、オフクロの御機嫌はかんばしくないんだし、しかし、行くところにしておきます。（略）これは、いやなお訊ね。結婚するとき、役場への届出手続はどうすればいいのでしょう。例の一件ですがね。子供もできるのに、その手続きをまだしないでいるのです。いやでいやで仕様がないのですが、女の方では、随分つらいでしょう。遠方だしするので、めんどうも一層なんです。子供は来月かその次ぎかにできる由、すると、やはり私生児とするのでしょうか。いい方法はありますまいか。何か、いい方法を、御職掌がら、教えて下さい。思い切って、籍を入れてやりましょう。イヤに、心ぼそい気がします。済みませんが、急いでいるのですがね。どうぞ、ご推察を。」

太田喜志子と結婚したのも束の間、父危篤の報に接し、慌てて故郷坪谷に帰って来たものの、父は、思ったより元気でした。

しかし、若山家の長男として、坪谷で職を見つけるように皆からさんざんに言われ、長期滞在をよぎなくされた牧水でした。

ところが、元気そうにみえた父も、11月14日に他界し、前にもまして家長としての牧水の責任は重くなりました。

一方、東京に残された喜志子は、間もなく妊娠していることが分かり、故郷の信州の広丘に帰ったのでした。そして、間もなく、子供が生まれるということでした。

牧水は、生まれて来る子を私生児にするのも忍びなく、また喜志子の肩身の狭さを思いやり、婚姻届や出生届について、いい方法がないかを、役場勤めの葉桜に、この手紙で相談しているのです。

3月の初旬から中旬にかけて、牧水は美々津に遊んだようです。

それは、3月19日、美々津からの帰り、高瀬舟の中で書いた葉桜宛ての次の手紙（註・小野葉桜遺稿歌集刊行委委員会発行の「悲しき矛盾」所収）で分ります。

「お目にかかって別れるということが何だか云うに云われぬ哀愁をおぼえさせるではありませんか。何も別離がつらいというのではありませんが、こういう出来事のために大変『一生』というものが砕けてゆくような気がいたします。お互いほんとに自愛したいものです。何もかもみな空しいとのみ思わるる心のわびしさに耐えかねます。何とかして自分というものを半分でも充実さしたいものです。こうわびしくては実際たまりません。今日は幸いに風があって舟あしもだいぶ早やそうです。今丁度福瀬を通りすぎたところ、もう僅かです。サイダー瓶をもう二、三本欲しかったとくやんでいます。一本では丁度悪いさかり。何だか世の中が悲しくなりました。親友のめじろ氏、だいぶ驚いたものと見えて初め悉く沈黙を守っていましたが、川岸の木立の中のと呼応して時々高音をもらし始めました。なかなかいい音のようです。短音ですけれど、非常な哀音悲調です。冠嶽が見えてきました。坪谷の方の山が深くかすんでいます。母を見るのが苦痛です。

冠　嶽

美々津であんな騒ぎをする自分がなんだか可愛ゆくてなりません。思い出すとまたこのまま引き返したくなります。酒が飲みたいというのではない。みな自分がいじらしい、可愛いからの所業だと考えられます。あなたがたの目にも留まったでしょうが、私のおちつきのないあわただしさ、なんというみじめないじらしいことでしょう。風が止みました。碧い流れの上を通っています。腹が少し痛い。めじろが少しも啼かぬ。この手紙を羽坂で出しときます。いつ届きますか。二十九日をほんとに待っていますよ！」

冠嶽を見、目白の声を聞きながら、碧い流れの耳川を高瀬舟で遡る牧水の姿が眼前に浮かぶようです。

しかし、この頃の牧水は、文学の道を進むために上京するのか、また残された母や姉の面倒をみるために、坪谷に留まるべきなのか、煩悶懊悩した日々であったことが、文面の端々に感じ取られます。

葉桜が、3月29日に、坪谷に来るというのが、待ち遠しく、牧水は、25日に、葉桜に次のような葉書を出します。

「いやに冷えると思っていたら、今朝尾鈴山の峯が、鹿の子まだらになっている。イヤなことだ。母が今日はナニも途中が寒かろうというから、誰がと訊くと、岩治（いわじ）（註・葉桜の本名）さんが来るのだろうという。彼女は旧と新を間違えていたのだ。待ち遠い。昨日ぱらぱら降る時にも心の中で考えた。降れ降れ、いま降って、そのころに降るなと、降られでもしたら、とほんとに僕はどうしようかしら、と思ってる。歩くのがいやだったら、おっくうでも富高に廻り給い。午後二時発山陰行の定期があるはずだ。おたのみのこと、お医者さんをしているのには早速云ってやっておいた。総督府にいるのは所がわからないので、他へ問い合わせ中、それに台雲寺の叔父も近いうちこの村へ説教に来るそうだから、その時話そう。」

三日も経たないうちに、牧水は、葉桜の来るのが待ち遠しくてならず、28日に、またも葉書を出します。

「きょうは、実にいいお天気だねえ。きょうをあしたになすよしもがなと思った。なアに、あしたもこの分なら、上天気だよ。今日は、これより、君へ飽食さすべく、山芋掘りに出かけむとぞ思っているところだ。この二三日、すっかり、おなかをこわして、眼のたまも二三寸落ち込んでるありさま故、掘るかしらんと思っている。掘れなかったら、明後日、一緒に掘りに出直そう。明日、なるべく早く来給え。二時富高発定期馬車に御厄介になる方がよくはないかナ。川のんぼりは疲れるよ。」

3月29日から二、三日、牧水と葉桜は、坪谷で一緒に過ごしたことと思われます。結果として、このときが、牧水が、葉桜と出会った最後になってしまいます。

約一ヶ月経った5月2日に、牧水は、葉桜に、次のような葉書を出します。

「世の中がつまらなくて、しかたありません。いやだいやだという気持のみ、頭のてっぺんにこびり着いていて、あとはすっかりぬけがらです。東京に行くなどというのも、至極いやな気持です。行かねばならぬような心がするので、目をつぶりながら出てゆく形です。多分、この十五日ごろでしょう。家を出ますのが、――も一度ぐらいお目にかかりたいとは思うけれど、無駄でしょう。

逢ったところで、しかたはないのだが、あきらめられません。まことにはかない気持です。延岡には、君からも直接手紙を出してみませんか。長田観禅（註・牧水の母マキの弟・台雲寺の住職）という名です。話はくわしくしておきましたから、ただよろしく頼むとだけでいいでしょう。その方がよさそうだ。」

ようやく母の許しを得て上京することになったものの、もう葉桜とは、逢えなくなると思うと何となく気が進まない牧水でした。葉桜の長田勧禅への頼み事が何であったのか気になるところですが、今となっては分かりません。

その一週間後の9日に、牧水は、田代の若山病院から、葉桜に葉書を出しています。

「一昨日であったか、たいへん乱暴な寄せ書きを君に送ったと、記憶している。あれから、ここに来ている。そうして、毎日、朝から、よろよろしている。君が、金丸に貸してあるとかいった『牧水歌話』を、左記のところへ、大急ぎで送ってくれたまへ。日がかからないように、まじめでお願いします。（どうも、永滞在になってこまります。もう今日頃、細島を出るつもりだったのに）」

なかなか上京する段にならず、焦っている牧水の様子が感じられます。

しかし、牧水は、5月15日、ついに坪谷を離れ、妻子と一緒に暮らすために上京します。そして途中、愛媛県岩城島に門下の三浦敏夫を訪ね、歌集『みなかみ』を編集します。その後小倉暮笛のいる明石、親戚の長田家がいる神戸、日高園助のいる大阪、京都、浜松などを経て、離郷して一ヶ月以上経った6月18日に東京に着きます。

さっそく、牧水は、葉桜に次のような着京の報を出します。

「十八日着、足地につかぬ。ちとご想像を乞う。八月一日から例の『創作』を復活発行する。近作の中から二三十首抜いて七月十日までに送ってくれ給え。こんどはこれで全然日本の短歌界を占領しよ

うと思っているのだ。その後お元気にや。」（註・祖国雑誌社投稿の「歌人牧水」所収）

文面から、牧水の復活「創作」に賭ける意気込み、鼻息の荒さが感じられます。

8月1日、念願の「創作」第三巻第一号が復刊され、それに、葉桜は「悲しき矛盾」と題して一七首を発表します。

冷笑の中の矛盾のおもしろさ身をめぐり泣く母と妻と子とありうち解けし話のをはり母上の冷笑に歯の見えしさびしさ

無心なる児にチャルメラを吹いてやるせむ術もなき親心かな

机に寄り二人の児等が泣声に物云へどただ黙りぬ夕ぐれ

むらむらと込みあげて来るくやしさに児を抱き占めて泣いている妻

夕ぐれにいなむを叱り酒買ひにおひやれば児もついて行きにけり

物ごしに母上の顔をぬすみ見て何か云はむとしみじみ思へり

鶏の雛啼けば繡眼児も鳴いて居り母とわれとのかなしきひ鳥

我が留守に小鳥に餌やることをさへ忘れて妻の衰へにけり

ありふれしたとへ話が我が上のごとく悲しく腹立たしきかな

人をのをのかくれたる罪ありと信じ自棄の心を慰めて居る

吾れ行けば到るところに烏啼くこころあやしくなりてけるかな

森に入ればまた森に来て烏啼く首でも吊ると思へるならむ

此度こそ死んでみせむと思ふ間に幾人も人の自殺しにけり

赤赤と花桐が庭に咲いて居り夏の真昼の歯の痛みかな

その唾液なぜ面上に吐かぬぞと反抗心を起して見るかな

父に似し我が子の顔をかなしくもうち守り居れば泣き出しにけり

いずれの歌も、貧しさの中に喘いでいる葉桜の悲痛な声が聞こえそうです。啄木の歌にも通じるような歌い方です。

10月にもまた、葉桜は、「創作」第三巻第三号に、「海辺にて」の題で、一六首を発表しています。

きり立てる岩かげにありき仰ぎたる真上の空の一面の昼

岩窟の曇れる浪に沈みゆく鰭(ひれ)のごとしこの瞳の疲れ

夕方にさびしや沖が曇り来て蜩がいま静に鳴き止む

信号機に青い灯を掲ぐる夜の港窓の下の海の疲れたるかな

赤い火が二人の間に燃えて居り舟間の磯の昼のさびしさ

長き岩の極まるところしらじらと流木立てり秋の蒼海

海の色すこし濁りて暮れてゆくも疲れたる目にこころよきかな

地平線の大船の帆に入日さし黒々としも暮るゝわだつみ

なるがまゝになれと自棄して今日といふ孤独をしとどいとほしみ居り

いまのうちに一人死にたくなりにけり自己を愛する心にかあらむ

世の人が笑へばわれもへらへらとおかしくなりて押し出し笑ふ

浪の音が静かになれば反抗せしこゝろ怖ぢけて海をのがるゝ

捕りてやれば唖蟬なりき摘まめどもつまめども鳴かずむづかる児かな

一合の二合の酒を飲むといへば一大事のごと諫むる妻かな

飲みあきて盃をおき梨の実をふくめば秋のさびしさを覚ゆ

いずこともなく虫が鳴き出しひえひえと盃の酒が歯にしみて来る

主として、美々津の港や権現崎、あるいは船間の磯の光景と葉桜のやるせない寂寥感が歌われています。

この年の暮れに、葉桜が、「祖国雑誌社」に投稿した「歌人牧水」が掲載されます。次にその一部を紹介します。

「牧水君は確かに中央歌壇に於ける一方の驍将で与謝野一派に対する好敵手である、其雑誌『創作』の経営は又彼の畢生の大事業たると共に歌壇に貢献する処、偉大なるべきを信ず。」

このように、葉桜は、「創作」を復刊した牧水の前途が洋々たるものであることを願って、郷土宮崎から餞の言葉を送ったのでした。

さらに、翌大正3年2月に、葉桜は、「創作」第四巻第二号に「岬の冬日」と題して次の一六首を発表します。

牡蠣の殻しろく砕けて岩に着けりこの昼いまだ汐もみたなく

冬の海風たちぬれば真蒼なる浪むらさきにざはめきたつも

焚火の痕しみものこれる荒磯の巌し踏めばか斯くは淋しき

踏めば岩ゆるぐをおぼえ絶大の力身うちにみちや来れる

冬の磯こごしきをふみかき裂ける足蹠の血にこころいらだつ

赤赤と椿おちちれる磯の上に大火焚きけり昼がさびしさ

岩窟一面ぱっとあかるく火の燃えて顔あか赤とてりわたりたり

午後の海なみむらさきに風起ちて岬けはしく汐ひけるかも

木にも石にもこの身をくくれ狂ふとも餓ゆとも更らに動かじものを

ひとしきり堅葉にかぜのざわめきて静なる夜の雪はふり出づ

雪ふれば石にねむれる舟曳の弟かなし妻も持たなく

小鳥飼ふさへいまはうとまし妻も子もこの鳥のごと放ちやらむか

冬の夜の炉にきえかかる火のさびしさまたも我等はおしだまりけり

児らはかく枕ならべていねて居りなりはひにいざ妻よいそしまむ

冬の陽に吸はれゆくべきさびしさかおくれて枇杷の花うすく咲く

とりのこされし青き蜜柑の春来れどいや青く枝に喰ひつけるかな

八　葉桜の第三の悲運

この頃までに、葉桜は、ほぼノート書きの歌集「悲しき矛盾」三二八首の編集を終えていたのです。まるで、後で起こる悲運を予期していたかのように。もし、そうでなければ、後の歌集「悲しき矛盾」は、この世には存在しませんでした。

3月2日、葉桜にとっての運命の日を迎えます。それは、いつものように勤務し、役場前の川島屋旅館で、耕地整理組合の晩餐会の席上のことでした。突然葉桜に幻聴が起こったのです。一旦直ったかに思えた脳の病気が再発したのでした。

葉桜は、家に帰ったものの幻聴は収まらず、状況のただならぬことを覚った葉桜は、3月25日に、後事を妻ナミエに託し、幾何かの金を持って、妻子を美々津に置き、ひとり田代の実家に帰郷したのでした。そして、弟米一宅で、看護を受けることになりました。葉桜の、作歌活動は、残念ながらこのときを以って終わったのです。突然の病気の再発が無ければ、恐らく葉桜は、美々津で生活しながらも、牧水の主宰する「創作」などに投稿しながら、それ相当の歌壇の評価を受け、歌人として大成したものと思われます。

その一ヶ月後の4月30日には、四男滋が誕生します。そして妻ナミエが女手一つで生活を支え、残された四人の子供を育てます。

六年後の大正9年（1920）、葉桜は、弟の米一一家と小川吐の新宅に移ります。

大正11年（1922）、長男博が小学校高等科を卒業したのを機に、ナミエは子供らを伴い上京します。たぶん、これからの子供の養育を思い、かつて過ごした東京に、より良い職を求めて行ったのではないかと思います。

かつての歌仲間だった小野兵太郎は、昭和2年から13年9月まで、第七代西郷村長となります。兵太郎は、その後、行政や政治の分野を歩いたのではないかと想像します。

昭和3年9月17日、数々の名歌・秀歌を残し、43歳の若さで、牧水が、沼津で死去します。

昭和6年には、葉桜の母チヨが死去します。

昭和16年には、葉桜の次男愛（めぐみ）が病死します。

その翌年、太平洋戦争さ中の昭和17年10月9日、葉桜は、弟米一宅で、一進一退の病状であったが、ついに永眠します。享年63歳。法名は、「禅学院秋岩月光居士」。墓は、旧西郷村厳島にあります。

同年、四男滋も、太平洋戦争で戦死します。

九　運命の東京大空襲

昭和20年4月15日、三男大森瑞樹が、東京大空襲に遭遇します。そのくだりを、伊藤一彦著「歌のむこうに」から引用すると、次のようなものでありました。

「昭和二十年四月十五日、夜十一時過ぎ突然、空襲警報発令。長女を背中にした妻と共に、近くの防空壕に飛び込んだ――その途端、私は大切な忘れ物に気付いた。『危ない！』と止める妻の手を振り払って家へ引返す。防空壕の外は既に侵入した米誘導機からの照明弾で、辺り一面煌々と照し出されている。B29の無差別爆撃が目前に迫った。私は玄関から一気に馳け上がると、机の引き出しから小さな風呂敷包みを鷲づかみにして、再び防空壕へ走った。私が危険を冒して持ち出した、その包みの中には、父、葉桜の遺品であるノート書きの歌集『悲しき矛盾』と、日記の断片、それに葉桜あての若山牧水の手紙十数通が入っていたのである。（中略）家を焼かれ、家財を失い、私に残ったものといっては、父の遺品を入れた風呂敷包み一つだけ、という惨めさだった。しかし、父を知らずに育った私にとって、この一冊のノートと牧水の手紙は、父を、また歌人葉桜を知る為になくてはならぬ資料であり、掛け替えのない唯一の片見の品でもあった。」

三男瑞樹の決死の行動で、危うく葉桜の歌集「悲しき矛盾」の原稿は守られ、この世に残ったのでありました。

葉桜が世に出るきっかけとなったのは、昭和44年に、美々津出身で、宮崎日日新聞の編集委員であった河野慶彦が、「薄幸の歌人・小野葉桜」を同新聞に一一回に渡って、連載したことでした。

それがもとで、葉桜の三男瑞樹とも連絡がとれ、「悲しき矛盾」の原稿が存在することが明らかになりました。

その後、河野慶彦と越智渓水が、歌集発行に奔走するも、諸般の事情で、実現しませんでした。

しかし、昭和62年6月に、葉桜の地元西郷村で、小野葉桜遺稿集刊行会が設立され、ついに、遺歌集「悲しき矛盾」が出版されました。実に数奇な運命をたどって、葉桜の歌集「悲しき矛盾」は、初めて世に出ることができたのであります。

もし、東京大空襲の際に、三男瑞樹が決死の覚悟で、原稿を持ち出さなければ、歌集「悲しき矛盾」は、決して日の目を見る事は無かったでしょう。

十　さいごに

私は、ここに、父と息子の深い絆を覚えざるをえません。同時に私は、次の佐佐木幸綱の歌を思い出します。

男と男父と息子を結ぶもの志とは悲しき言葉

特に葉桜が、息子瑞樹に、「悲しき矛盾」の原稿を守るように命じたわけではないのに、父の文学を志した気持ちは、息子にしっかりと伝わっており、そのお陰で、葉桜の遺歌集「悲しき矛盾」が、この世に出ることができたことは、まさに奇跡であったと言えると思います。

若死にではあったが、歌人として大成した牧水。政治家として西郷村長になった小野兵太郎（紫苑）。薄幸ではあったが、死後に歌人として評価された葉桜。山一つを隔てた東郷村坪谷と西郷村田代に生まれ、共に文学を志した三人の生きざまに、私は、明治の日向の片田舎に、三人三様の「坂の上の雲」を見る思いがします。まさしく明治は、「志の時代」であったといえるのではないのでしょうか――。

【参考文献】
「若山牧水全集」（雄鶏社版）
「小野葉桜遺構歌集　悲しき矛盾」（小野葉桜遺稿歌集刊行会）
「小野葉桜遺稿歌集　悲しき矛盾」（鉱脈社）
「西郷村史」（平成5年11月30日発行）
「歌のむこうに」（伊藤一彦著・本阿弥書店）